

【研究ノート】

村落行政とジェンダー ——東北タイ農村における女性リーダーの ライフヒストリーから¹——

木 曾 恵 子

1. はじめに

本稿では、東北タイ農村における女性リーダーの聞き取り調査に基づいて、彼女が地域コミュニティのなかでリーダー的存在となっていた背景について、ライフヒストリーから明らかにしたい。そのうえで現代の東北タイ農村という地域コミュニティを維持・創出しようとする女性リーダーの行為主体性と社会関係について考えてみたい。調査地はタイ東北部にあるマハーサラカム (*Mahasarakham*) 県 N 郡である。調査対象者は、筆者が10年以上関わってきた調査村でリーダー的な存在となっている50代の女性である。

タイにおいて政府や地方行政は、1960年代以降、主に上からの農村開発をすすめてきた。その過程で官製の住民組織の形成が奨励され、実際に地縁に基づいてさまざまな住民組織が結成されてきた。住民組織は政府事業へ住民を動員する仲介組織として、村落行政にとっても不可欠の要素である [重富 1996]。また住民組織は行政の指導を受けるものの、設立以後の運営は各組織にまかされ、住民が相互に助け合うかたちで組織、運営されている [佐藤 2009]。農村開発では女性のエンパワーメントにも力が注がれ、特に

既婚女性の組織化が推奨された。住民組織は親族・家族ネットワークを超えた行政的な相互扶助組織であり、農村女性と地域コミュニティ、および家族の双方を結びつける媒体ともなっている [木曾 2016]。

その一方で、地方行政の要職における女性の比率は高くはない。女性は住民組織のリーダーや村レベルの保健衛生、医療に携わる地域内保健ボランティア (*O. So. Mo.*) など、農村の既婚女性として、あるいは福祉面を通して村落行政に携わることが多い。そこには、村落行政における男性の主導的役割と女性の補佐的役割という規範が垣間見える。

そうした状況のなかで東北タイ農村女性が村落行政のリーダー的存在になる/なろうとする時、社会文化的構造や微細な社会関係、個人的価値観のなかで、どんなかたちで行為主体性を発揮している、あるいは発揮できないのか、または期待されているのかを考えてみたい。また村落行政とジェンダーという課題に対して、何が問題として認識されているのか、彼女たちの生に寄り添った問いを導き出してみたい。

本稿の構成は以下のとおりである。1章に続いて、2章では、東北タイ農村の村落行政とジェンダーについて、規範と調査地の現状について明らかにしたい。3章では、調査地の村落行政においてリーダー的存在である女性のライフヒストリーを取り上げる。4章では、彼女に対する周囲の評価について述べる。5章では、彼女のライフヒストリーから彼女がリーダーになっていった経緯を明らかにして、女性リーダーの行為主体性と社会関係について考えてみたい。

2. 東北タイ農村の村落行政とジェンダー

2018年現在のタイは、バンコク首都府と77の県からなる。そのうちメコン河を境にラオス、カンボジアと国境を接する20県が東北タイ地域である。2000年の人口センサスによれば、東北タイにはタイ全土の人口の3分の1

に相当する約2,000万人以上の人々が暮らしている [NSO 2010]。本稿の調査地は、この東北タイがあるコラート高原の中央部に位置するマハーサラカム県 N 郡 S 区の一行政村である。主要産業は農業、特に天水に依存した水稲耕作だが、土壌は砂岩由来の砂質土壌が大半を占め、肥沃度が低く、水分保持能力も低い。また降水量は平均1,200ミリメートル程度で、灌漑設備も十分に整備されておらず、米の生産性は高くない。現金収入は主に余剰米やキャッサバ、野菜などの換金作物、および家畜の販売、農作業や建設作業などの日雇い労働、小規模店舗の経営などから得ている。近年は近隣で稼働し始めた縫製工場勤務や商業区での就労も増えてきているが、より良い賃金が得られる首都圏や外国での就労が常態化している。

マハーサラカム県は首都バンコクから東北へ約440キロメートル、空港や鉄道の駅はなく、長距離バスで約7時間のところにある。N 郡都は県都から南西に約50キロメートルのところに位置し、そこから調査村までは車で20分程度である。調査村内には寺院と小学校、小さな雑貨屋が数件あるのみだが、N 郡都には各種公的機関や病院、郵便局、銀行、中等教育機関、常設市場やスーパーマーケットなどがあり、住民はバイクや自家用車、乗合バスを利用して往来している。

県都と N 郡都とを結ぶ幹線道路沿いには、水田が広がり、集落が点在している。その集落の合間に、時折小さな森がある。この森には、開村以来住民が継承してきたと言われる村の守護霊 (*phi pu ta*) を祀る祠がある。調査村では毎年陰暦の6月にチャム (*cham*) と呼ばれる儀礼執行者をともない、住民が集まって稲作開始前の降雨占いや供宴が行われる。祠には村の開村者の霊が祀られていると言及され、村の守護霊儀礼は2001年に行政的に分村した隣村住民とともに執り行われている。

調査村の集落は、約130年前に隣県ローイエット (*Roi Et*) 県スワンナブーム郡 K 村からやってきた人々によって形成された²。最初の開拓者集団は3

人の男性リーダーとその近親者4,5世帯であった。20世紀前半まで、東北タイの人々は開拓移住を繰り返して集落を形成してきた³。開拓移住の過程について綿密な聞き取り調査から明らかにした林によれば、ラオスのヴィエンチャン (*Vientiane*) からチャンパーサク (*Champasak*) へ南下し、チー川沿いにタイのウボンラーチャタニー (*Ubon Ratchathani*)、ローイエット、マハーサラカム、コーンケン (*Khon Kaen*)、ウドンタニ (*Udon thani*)、ルーイ (*Loei*) と、人々の開拓移住ルートは北西に向かってすすんでいた [林 2000: 86]。本稿の調査村もこの開拓ルート上に位置している。

現在タイの地方行政は、県 (*cangwat*)、郡 (*amphoe*)、区 (*tambon*)、村 (*mu ban*) という4つのレベルから構成される。マハーサラカム県は13の郡に分かれ、その下に133の区と1,804の村がある。N郡は10の区に分かれ、調査村のあるS区には15の村がある。そのうち4村は2001年のタクシン政権樹立以降に分村した。調査村でも集落北部が新たな行政村として分村した。ただし2つの行政村は寺院と小学校を共有し、集落単位で実施される年中行事や仏教的集合儀礼、村の守護霊儀礼を共催する。

地方行政において県知事と郡長は内務省から派遣されるが、区長と村長、および副村長は住民から選挙で選ばれる。区長と村長は郡長の指揮監督下でローカルな治安維持や開発行政を担い、行政村単位で住民登録や選挙管理、教育、保健行政などを行う。

現在、地方行政の要職における女性の比率は高くはない。従来、開拓移住によって形成された集落では、草分けの子孫の男性が村長など集落の有力者となっていた。また、村の守護霊儀礼を執り行う司祭チャムも男性であった [Tambiah 1970 ; 林 2000]。

表1は2018年8月現在のN郡の区長、村長、副村長の構成を示したものである。そのうち区長は全員が男性、村長も93%が男性である。一方、村長の補佐的役割の強い副村長になると、女性の数が増えて31%となってい

表1 N郡の区長、村長、副村長の構成（2018年8月現在）

	男性（人）	割合（％）	女性（人）	割合（％）
区長	10	100.0	0	0.0
村長	126	93.3	9	6.6
副村長	192	68.6	88	31.4

[出所：筆者調査から作成]

表2 N郡S区の区評議会委員構成（2018年8月現在）

	男性（人）	割合（％）	女性（人）	割合（％）
区評議会委員	27	90.0	3	10.0

[出所：筆者調査から作成]

る。また各村から2名が選出され、行政村代表として区行政に携わる区評議会委員も90％が男性である（表2）。

このように東北タイ農村では、政治や宗教などの公的領域において男性が主導的立場にある一方で、女性は補助的役割を期待される傾向がある。家父長的なジェンダー規範がより強い南アジアと比較すれば、女性個人に対する家事や育児といった役割期待や公的空間における行動制限などの影響は小さい。またタイでは賃金労働を含む女性の経済活動が活発であり、その自立性や社会進出も注目される。しかし政治・宗教的領域では、女性は構造的に排除されていると論じられてきた [Kirsch 1975, 1985; Keyes 1984]。出家宗教とも言われる上座仏教社会であるタイでは、女性の出家は認められていない。男性は出家し社会的地位の高い僧侶となるか、在家のままにいるかを選択できるのに対し、女性は出家という道からは構造上排除され、出家者集団サンガを支える在家の役割のみを担う。タイでは出家が最大の功德行為であり、親孝行の代名詞でもあるが、それができない女性は経済的領域で親や家族を支えることが期待されてきた [Kirsch 1975]。

村落行政とジェンダー

現在、N 郡内では女性の村長は 9 名、副村長は 88 名いる。調査村では最近では 2016 年に村長選が行われ、それまで 30 年間村長を務めた男性に代わって、その甥で副村長を務めていた 40 代男性が新村長として就任した。その新体制の下では、副村長 2 名が女性となった。副村長 2 名は、当時村長選に立候補したものの落選している。また村の自治を担う村落委員 (*kan-makan mu ban*) 17 名中 5 名が女性であり、さらに村レベルの保健衛生、医療に携わる地域内保健ボランティアは 12 名中半数が女性である。

このように実際には村落行政に女性が携わること自体に制約があるわけではなく、むしろ公にはその活躍が推奨されている。女性は村落行政に携わるにしても補助的役割が向いているという言葉は、調査中に何度も耳にした。2018 年 8 月に行った調査村の村長、および S 区長への聞き取りでも、両者ともに地方行政に女性が携わり、その能力を発揮することは大いに賛成であるとの意見を述べた後、女性は「会計や書類の作成など事務作業に向いている」とその補佐的役割を同様に強調していた。

また N 郡の区長、村長、副村長の学歴は男女とも総じてさほど高くない。表 3 に示したように、区長は過半数以上が高卒以上である。村長では高卒以上と高卒以下の数がほぼ同じであり、副村長になると高卒以下が過半数を超える。

さて、このような東北タイ農村の村落行政とジェンダーを取り巻く状況の

表 3 N 郡の区長、村長、副村長の学歴 (2018 年 8 月現在)

(単位: 人; %)

	小学校	中学校	高校	職業訓練学校	短大	大学	未公表
区長	0 (0.0)	1 (10.0)	5 (50.0)	1 (10.0)	0 (0.0)	3 (30.0)	0 (0.0)
村長	36 (26.7)	20 (14.8)	65 (48.1)	8 (5.9)	0 (0.0)	6 (4.4)	0 (0.0)
副村長	134 (47.9)	53 (18.9)	74 (26.4)	11 (3.9)	1 (0.4)	1 (0.4)	6 (2.1)

[出所: 筆者調査から作成]

なかで、地域コミュニティのリーダーになろうとする女性はどのような人物なのだろうか。

3. ワンのライフヒストリー

本章では、調査村の副村長であるワン（仮名）のライフヒストリーを記述する⁴。本稿で使用するデータは、2005～2006年2月、および2017年8月、2018年8月に筆者がワンに実施した断続的な聞き取り調査によるものである。

ワンは51歳の女性で、調査地の生まれである。2018年現在、調査村において副村長、保健ボランティア、女性住民組織 (*klum satri mae ban*) 委員長、小学校の地域コミュニティ代表委員など複数の役職を兼任している。村落行政で役職に携わるとともに、農業で生計を立てている。夫は63歳で、同様に農業に従事している。28歳の独身の息子がいる。

(1) 生き立ちと出稼ぎの経験

ワンは9人兄弟姉妹の3番目で、1967年に長女として生まれた。両親は調査村の草分けの子孫であり、母方祖父は悪霊祓いの祈祷師モー・タム (*mo tham*)、父方祖父は村長だった。母親は18歳でワンの父親と結婚して8人の子どもをもうけたが、下の子どもたちがまだ幼いうちに父親が病死してしまう。その後、ワンが12歳の時に母親が再婚した。再婚相手はワンが住む家の斜め向かいに住んでいた男性で、彼も妻に先立たれていた。彼には前妻との間に9人の子どもがいて、末子はワンと同年だった。ワンの母親と再婚後、再婚相手だけがワンの家で暮らし、彼の子どもたちはそのまま自分の家で暮らしていた。その後、ワンが14歳の時に妹が生まれた。

ワンが子どもの頃、家はとても貧しかった。両親は天水稲作で生計を立てていたが、自給分もままならないほどで、ワンの記憶にある限りでは余剰米

が出るほどの余裕はなかった。母親は教育熱心でワンも勉強が大好きだった。しかし下の2人の妹以外は村にある小学校しか出ていない。村外にある中学校に行くためには、交通費をはじめとする現金が必要だったためである。当時、隣に住んでいた教師の一家が学校の話をしてくれたり、郡都や県都へ行く度に果物やお菓子、スルメなどのおみやげをくれたりするのが本当に楽しみだったという。

母親の再婚相手は農業のかたわら地方を移動する商人 (*nai hoi*) としても働くなど、積極的に現金収入を得ようとする人物だった。母親と再婚後、彼はワンたちが住む家屋を担保に農業・農業協同組合銀行から融資を受け、約10ライ⁵の農地でマンゴー栽培を始めた。最初の2年は収益を翌年の資金に回すことができたが、3年目以降は水と土地不足のために利益を得るほどの収穫にはならなかった。それ以降、マンゴー栽培は続かず、残ったのは借金だけであった。

その頃、調査村出身の男性が働く中部・ラチャブリー (*Ratchaburi*) 県の縫製工場で若い女性工員を募集しているという話があった。ワンはその男性の母親から誘われ、友人らとその工場働くことを決めた。

一家を出て働きに行ったのは、いつですか？

たぶん17歳の11月頃。稲刈り前に家を出た。次のタイ正月に帰省したけど、また行って、12月の稲刈り前に家に戻ってきた。

—誰と行った？

プイとムンとマー⁶・テムの妹とか、8人くらい。ラーの親戚がラチャブリーまで連れて行ってくれた。ラーのお母さんが誘いに来

て。息子がラチャブリーにいる。今もいる。パイとムンも行くって
いうから、わたしも行った。だって、友だちがいなくなるじゃない。

でも最初の1週間はひとりであるのがさみしくて、ほとんど毎日泣いていた。ずっと立ちっぱなしで、働くのも辛かった。毎日、
すごく疲れた。そのうち慣れてきたけど。でもやっぱりさみしくて、金曜日には毎週、母に手紙を書いていた。

—工場で給料はどれくらいもらえた？

月3,500バーツだったと思う。そのうち2,000バーツくらいは家に送っていた。

—お金はどうやって送っていた？

母に手紙を書くでしょ。そのなかによくお金を入れていた。だけど無事に届くこともあれば、届かないこともあった。1,000バーツ札が1枚なら中身はばれないかもしれないけど、少ない給料から一生懸命貯めていたから、100バーツ札で数千バーツ分を送ったりしていた。厚みで中身がばれて、盗られちゃったんだと思う。帰省する人に預けて、手渡しするのが最も安全な方法。

働きに行く前は、工場に行ったら簡単にたくさんお金を稼げると思っていた。なんか、夢みたいにそう思っていた。だけど行ってみたら仕事も大変だし、お金だってそんなにたくさん稼げるわけじゃない、っていうことがすぐにわかった。給料も安いし。青い上着と黒いズボンの作業着も1着1,000バーツで買わないといけなかったし。だから、お金はいつもなかった。

だけど、それでも母にお金を送ることはできた。わたしが父の借金を返したんだよ。実家の2階の仕切りの壁だって、わたしが働いたお金で取り付けたんだから。それから、弟が宝石加工の研修をする費用の2,500バーツだって、わたしがお金を出したのよ。

(2) 結婚

ワンはラチャブリー県から村に戻った翌年19歳の時に、調査村出身の夫と結婚した。夫とは子どもの時からの知り合いだった。

—今の女の子たちとピー⁷・ワンが若い頃とは、生活が違っていると思う？

全然、違う。う～ん。今みたいに1人であっちに行ったり、こっちに行ったり、村の中だって歩けなかった。よくお寺で映画上映なんかがあって、いつもすごく楽しかった。だけど、それを見に行くのだって、1人ではとても行けなかった。

—じゃあ誰と行くの？お母さん？

お母さんと、っていうわけでもない。年上のお姉さんやお兄さんたちと一緒にいたら大丈夫。だから兄や弟、ブイヤムン夫婦、ピー・ブンなんかとよく一緒に連れ立って歩いていた。

—小さいときからピー・ブン(現在のワンの夫)は同じグループだったんだ。

まあ、そうだね。でも、お兄ちゃんとしか思っていなかったけど。そういうグループでいつも連れ立って歩いていた。だけど、今

の子は1人でもバイクに乗って村の外に出て行くし、男漁りみたいなこともしている。それは親も止められない。

— どういう経緯でピー・ブンと結婚したの？

ピー・ブンと結婚する前に、結婚したいと思っていた人がいた。あなた（筆者）も知っている人。彼が母にわたしと結婚したいと言いに来たことがあった。でもわが家は貧乏だったから、彼の母親は猛反対だった。それを知っていたわたしの母も、彼はわたしとは釣り合わない、この結婚に反対した。母が反対しているのに、それ以上、わたしは何が言えるの？

結局、彼は隣村のわが家よりも裕福な家の女性と結婚した。彼の結婚式当日、行くつもりなんかなかったけど、誘われたから行ってみたら、彼はわたしを見て泣いた。

それから少し経って、わたしは母が勧めるピー・ブンと結婚した。

— ロマンティックだけど、なんだか悲しい話だね。結婚してから2人はどこに住んでいた？

母の家。ピー・ブンのお母さんは一緒に住みたかったけど、わたしは嫌だった。ピー・ブンの妹も家を出てしまったから、お母さんは家に女の人を置きたかったのだと思う。でもわたしは嫌だったから、実家に住んだ。兄と弟たちはもういなくて、妹たちしかいなかったし。それに私たちが住み始めてすぐ、下の妹は（タイ東部にある）サムットプラカーン (*Samutprakarn*) に働きに行ったから。

—実家に住んでいたのはいつまで？今の家にはいつから住んでいる？

実家には3年くらい住んだかな。

その頃、わたしは闇宝くじを売っていたの。村の人たちに売って、利益を郡都にいるボスに渡していた。それで儲けたお金で、まず牛を1頭買った。それから3頭目を買った後に、息子が産まれた。

—ピー・ブンじゃなくて、ピー・ワンが宝くじを売り歩いていたの？

だってピー・ブンはそういうお金を稼ぐようなことができないから、わたしがするしかないじゃない。

息子が産まれてから、ピー・ブンのお母さんがピー・ブンの叔父さんが持っていた土地に私たちが住んでもいいと言ってくれた。ほら、ピー・ブンの弟家族がいま住んでいる所。あんな端っこ、嫌でしょ。実家からも遠いし。だから宝くじを売って貯めたお金で、今の場所に土地を買った。わたしの父親の弟のものだった。当時3,000バーツ。

家を建てる材木だって、わたしは機会を見てはもらったり、自分で切ってきたりして集めていた。ピー・ブンなんて、わたしが何のために材木を集めているのか、全然わかっていなかった。

(3) 村落行政への参入

1995年、東北地方開発促進計画の下、調査村では女性住民組織の活動が活発化する。大規模な研修の後、伝統的産業である養蚕や機織を女性たちがグループで行い、多少なりとも現金収入を得ている。また女性たちにとって

住民組織の活動は現金収入だけではなく、組織の運営や資金の管理、技術の習得など主体的行動を模索する機会にもなっており、農村女性が行政の場に参加する際の主な手段のひとつとなっている [木曾 2016]。

2014年から、ワンは調査村の女性住民組織の委員長となった。調査村で女性住民組織が発足した当時の委員長は、ワンの母親である。当時から母親は、ワンも住民組織の主流メンバーとして活動に参加させていた。ワンは2004年頃には会計として組織委員の1人となり、各種研修や会議には当時の委員長に代わって積極的に参加していた。その頃は同時に、村の寺委員 (*kanmakan wat*) や村落基金委員 (*kanmakan kong thun mu ban*) を兼任していた。

またワンは村レベルの保健衛生、医療に携わる地域内保健ボランティアも兼任している。保健ボランティアは、政府から月600バーツ程度の報酬を受け、保健衛生、医療に関わる研修を受けた後、地域内の高齢者を巡回したり、村内の各世帯を訪問して保健衛生、医療に関わるデータを集めたりする。もともとは保健ボランティアもワンの母親が引き受けており、まとまった現金収入のなかったワンに勧めた。保健ボランティアは人気が高く、地域によっては選挙で委員を選出するところもあるようだが、調査村では任される仕事の量とレベルが高いため、そこまで人気はない。

そして、ワンは2016年には村長選に出馬する。惜しくも落選したが、現在は副村長として村落行政に携わっている。

—ピー・ワンは行政上の役割をいくつも担っているが、そのような役割を担うためにどのような勉強をした？

コー・ソー・ノー (*ko.so.no.*, ノンフォーマル教育およびインフォーマル教育) でモー・ホック (*mo.hok*, 高校3年相当) まで勉

強した。それ以外に、行政の勉強を特別にしたわけじゃない。

行政の知識も大事だけど。それは委員をやりながら覚えればいい。村長とか経験者が教えてくれる。

わたしたちのコミュニティでは、それよりも誰とでもうまくやれる能力の方が大事。いろいろな人を知っていると。ちゃんと話を聞いてくれるとか。そういう人はみんなが推薦してくれて、その役職に就くようになる。

—村長は学歴が高くないといけないとか、そういう条件はないの？

わたしたちの世代で大学を出た人なんていない。そういう人は先生とか公務員になっている。

学歴は関係ない。その人の能力が重要。村長の子もだとか、両親のバラミー（*barami*、威光、徳）を受け継ぐこともあるけど、それでも能力がなければそのバラミーだけではだめ。

ポー⁸・チャン（前村長）はこのあいだの村長選で弟を候補として立てようとしたけど、あの人の立候補はみんな嫌がった。あの人にはバラミーがないから。しかも甥（現村長）が立候補しているのに、前の村長はどうして自分の弟を立候補させるのか、ってみんな批判した。結局、ピー・ヌイ（現村長）が当選した後も、ポー・チャンはピー・ヌイがやろうとすることに文句を言ったり、反対したり、わたしも母もポー・チャンがそういう人間だと思わなかった。

ピー・ヌイはリーダーとして、よく相談ののってくれる。女性住民組織の予算を申請する時も、申請書の書き方や役人との話し方など細かく教えてくれる。女性住民組織の研修や会議でも、いろいろなところに行けるし、いろいろな人と知り合えて楽しい。ご飯とか

村落行政とジェンダー

おやつだっていっぱい出る。それにみんないろいろ教えてくれて、勉強もできる。

—地域コミュニティのリーダーにとって、女性であることと男性であることは違う？

違う。リーダーになる人は、男性でも女性でも、確固たる気持ちで一生涯懸命さと村を発展させようという同じ目標を持っているから。

ただ女性リーダーの場合は、リーダーとしての仕事とともに担わなければならない義務もある。家族の面倒もみないといけない。家のこともやらないといけないけど、男性のリーダーは家のことには責任をもっていないと思う。

妻や母が役職についても、夫は何も言わない。妻が出稼ぎに行っても、夫が子どもを育てている家だってあるでしょ。小さい子どもがいたってできる。昔はタイも女性は家庭に縛られていたけど、今は欧米の女性と同じ。

以上、女性リーダーであるワンのライフヒストリーについて、生い立ちと出稼ぎの経験、結婚、村落行政への参入に焦点を当てて述べた。次に、女性リーダーであるワンに対する地域コミュニティからの評価について述べる。

4. ワンへの評価

リーダーとしてのワンへの周囲の評価は、概ね肯定的である。2016年、村長選に出馬したワンは惜しくも落選するが、新村長は副村長2名のうち、まずはワンを指名した。その主な理由として、前村長体制下での各種委

員の経験や実績、女性住民組織や保健ボランティアを率いて活動しているリーダーシップ、その行政的手腕を挙げた。新村長はこうしたワンの経験や能力、そして主体性は、村の同世代の女性のみでは群を抜いて評価できると述べている。またもう1名の副村長は、経験者の中から新村長とワンが相談して決定した。

前村長体制下でも、ワンを村落委員の活動に引き入れたのは前村長であった。前村長は、女性住民組織の活動でリーダーシップを発揮していたワンを村落基金委員に推薦した。その働きぶりを周囲から評価され、ワンは寺委員や小学校の地域コミュニティ代表委員などその他の村委員も兼任するようになった。また前村長は郡都や県都で行われる各委員の会議や研修にもワンを連れ出し、ワンに秘書的役割を担わせた。社交的な性格であるワン自身も、そのような機会に積極的に参加し、会議や研修の作法や書類の作成方法などについて学び、社会関係を広げていった。

もともとワンをリーダー的存在として住民組織の活動に誘ったのは、ワンの母親である。1990年代後半の東北地方開発計画において新たに女性住民組織を組織化する際、前村長はワンの母親をリーダーの1人に推薦した。その後、2000年代に組織の世代交代を図った際には、リーダーである母親はワンを秘書として住民組織の委員を再編した。

その当時、ワンは女性住民組織の活動においてリーダーシップを発揮していたが、時にはその強いリーダーシップが騒動をもたらすこともあった。たとえば、筆者が定着調査を行った2005年末、あるグループの結成をめぐって騒動が起こった。ワンが調査村の女性住民組織の代表として郡主催の会議に参加した際、地元政治家からグループで機織をする原材料として絹糸の支援を受けた。その絹糸を村に持ち帰ったワンは、早速親しい友人と、誰を機織グループのメンバーにするかという話し合いを始めた。機織グループはすでに存在していたが、ワンはそのグループで作業するのではなく、自分が

リーダーとして組織する新グループを作ろうとしていた。

新グループを組織しようとしているワンたちを見てワンの妹は、「女性住民組織の仕事なのだから、2人で決めるのではなくて機織グループのリーダーに相談してから決めるべきだ」と提案した。しかしこれに対してワンは、「私が会議に参加して、私が絹糸をもらってきたのだから、私が決める」と言い張った。その翌日、この顛末を聞きつけた20代の女性が、機織をするなら自分もグループに入れてほしいと願い出てきた。女性はこれまでグループ活動には参加したことがなく、隣村の縫製工場で働いていた。ワンはこの申し出に対して、「私が会議に参加して、私が絹糸をもらってきたのだから、私が全部自分で決める。あんたには絹糸は渡せない」と強く反発した。この発言を発端にして、ワンと女性はお互いを罵り合う大喧嘩を始めた。

2人の喧嘩は、20代女性による村長への訴え、母親同士の仲裁を経て、女性住民組織全体の問題へと発展した。女性は自分もグループの活動に参加したいと思っていたが今までワンたちに誘われなかったと主張し、ワンはそれに反論しながらも、「会議がある度に村長から頼まれて（隣の）コーンケン県や県都まで会議に行ったり、書類を作ったりしているのはいつも私だ。この絹糸だって、みんなが会議に行きたくないと言ったけれど私が行ったからもらえたのだ。だから、自分は新しいグループを作るつもりでいる」と強く主張した。結局、ワンの母親を中心とする女性住民組織のメンバーで話し合った結果、ワンの主張は却下され、従来の機織グループに20代女性も加えて絹織物生産を行うことになった。

このように、ワンのリーダーシップに対して否定的な評価がないわけではない。とくに母親や妹はワンのリーダーシップや社交性がもたらす成果を肯定しつつも、その反面で巻き起こる騒動には辟易している様子が見受けられる。

5. 考察

以下、ワンへの聞き取り内容だけから東北タイ農村の女性リーダーに関して議論するのが難しいのは承知しているが、まずは彼女のライフヒストリーから何が見えてくるのか、彼女はライフヒストリーで何を語ったのか考えてみたい。本章ではワンの聞き取り調査の結果を簡潔に整理したうえで、ワンがどのようにしてリーダー的存在になっていったのか、行為主体性と社会関係という観点から考えていく。

まず、ワンの属性を整理してみたい。1967年生まれのワンは、同世代の調査村、ひいては東北タイ農村女性のなかで、どちらかといえば典型的な例である。農業を営む両親のもとに生まれ、小学校卒業後は進学していない。稲作と上座仏教的年中行事のサイクルのなかで、農作業や牛追い、養蚕・機織、儀礼など、主に母親の仕事を手伝って暮らしていた。恋愛や結婚に対しても、年配者、とくに母親の意見に従うという規範的制約のなかで、誰と結婚するのかという選択をしている。

ワンは小学校しか出ていないが、表3にも示したように、N郡の他のリーダーたちの学歴も総じて高くはない。そのことから、東北タイ農村の地域コミュニティにおいて女性がリーダーになる際に、現時点では学歴への期待はさほど高くはないことがわかる。ワンやS区長、調査村村長への聞き取りでも、リーダーになる条件として、学歴は関係ないと繰り返し強調されていた。ただし2000年代以降は大学に進学する者が男女ともに格段に増えてきているので[木曾 2010]、次世代は学歴の基準が上昇することは十分に考えられる。

そうした状況のなかでワンは結婚、出産、子育てを経験した後、30代でノンフォーマルおよびインフォーマル教育という機会を使って、高校卒業資格を得ている。タイのノンフォーマルおよびインフォーマル教育である

コー・ソー・ノーとは、ワンのような中退者やタイの公的な教育を受けていない山岳民族などを主な対象とした初等、中等教育課程の学習機会である。生涯教育としては古くから行われていた制度だが、2008年に改めて法制化された。公立の社会人学校のようなところで、週に何度か村内へ教師が派遣されて授業が行われ、正式な修了資格も得ることができる。学歴は関係ないと言いながらも、ワンは農業や子育て、委員活動など忙しい日々の合間をぬって勉強し、高校卒業の資格を得ている。

また1980年代前半、17歳のワンは中部・ラチャブリー県に出稼ぎに行く。1960年代前半からタイ政府が工業化を本格的に開始し、バンコク首都圏に新設された世界市場向け製品生産工場への労働人口の集中が起こった。多国籍企業のタイへの進出と工場増設による労働市場の拡大によって、それまであまり村の外へ出て行くことがなかった地方農村の未婚女性がバンコク首都圏へ向かい始めた。当時工場で求められた労働力の多くが、手先が器用とされ、夫や子どもに対する責任や制約もない未婚女性であったためである。低学歴で技術を持たない地方農村出身者は、それゆえに低賃金で雇われていた [Pawadee 1982]。こうしたタイの経済構造の変化のなかで、調査村からバンコク首都圏へ女性が出稼ぎに行くようになったのは1970年代前半である。筆者の調査の限りでは1970年代には8名、1980年代には調査村から49名の女性がバンコク首都圏へ出稼ぎに行っている [木曾 2010]。東北タイ農村女性が新しい時代の波に飲み込まれていったなかで、ワンもその流れに乗って新しい経験をしていた。

次に、ワンをめぐる社会関係について考えたい。ワンの両親は調査村の出身で草分けの家系である。母方祖父は悪霊祓いの祈祷師であり、父方祖父は村長だった。経済的には貧しかったものの、地域コミュニティのなかでのワンの家の社会的な地位は低くはない。またワンの実家は村の寺院から続く参道沿いにあり、途中にある集会所の土地の一部も含めて、もともとはワンの

祖母の土地だったものを村に寄付している。ワンの家の公共的なものに対する犠牲的な姿勢も、地域コミュニティのなかで可視化されてきた。さらに、母親の存在がある。上記の理由に加えて人格者でもあるワンの母親は、村長の信頼も厚く、調査村で女性住民組織を結成する際に委員長として指名され、その後も村長から勧められて保健ボランティアにも従事している。その意味でワンにとって母親のパラミーはとても大きい。それに加えて、出稼ぎやその他現金獲得活動、女性住民組織の活動、各種行政委員の活動によって、ワンの社会関係は親族・家族ネットワークを超えて村外に広がっている。

最後に、上記の社会関係の広がりを含めて、ワンがどのように地域コミュニティを維持・創出しようとするリーダーになろうとしたのか、行為主体性という観点から考えてみたい。

1990年代以降の人類学では、植民地化や開発、経済のグローバル化が、各地域における性別役割分業に与えた影響を、マクロな政治経済構造や国家との関係のなかで分析し、それぞれの歴史文化的状況や階級、エスニシティ、ジェンダーが交差する場で生まれる現象を論じてきた。そのなかで研究者は、マクロな政治経済構造に影響され続けながらも犠牲者としてではなく、主体的に変化を生み出していくエージェントとして女性を位置づけた。アブ・ルゴットは、個人の日常実践のなかにマクロな権力関係の影響を読み取り、個人を創造的な主体として、制度を変革させる可能性がある存在として捉えている [Abu Lughod 1990]。ただしネパール・ヨルモ女性の行為主体性を論じた佐藤も述べるように、行為主体性がない人などいない [佐藤 2015]。自らが生きる社会・文化的構造のなかで、人は常に何らかのかたちで行為主体性を発揮して生きている。すなわち筆者は、公的領域において女性は補助的な役割を担うとされる東北タイ農村の社会・文化的構造のなかで、リーダーになろうとする女性に行為主体性があった、と言いたいわけではない。そうではなく、具体的にどのような構造的な制約のなかで、いつ、

どのような行為によって主体性を発揮したのか/しようとしたのか、について多少の考察を試みたい。

東北タイ農村の地方行政において、女性が要職に就くことは否定されていない。むしろ公の言説では推奨されている。しかしながら、男性は主導的役割、女性は補佐的役割という認識は根強い。そうした社会/文化的構造のなかで、ワンは自らの社会関係を徐々に広げている。ラチャブリー県への出稼ぎは、ワンが自ら切望したというよりも、父親の借金を背景にしてたまたま起こった工員の募集など偶発的な選択であったが、それまで村内でさえ1人で歩けないと思っていたワンを家族から離れた村の外の社会へと引き出した。また結婚に際しては、当時の社会・文化的構造の制約に立ち向かうことなく受け入れているが、結婚後はどこに住むか、いつどのように家を建てるのかなど、その資金繰りも含めてワンは夫とほぼ相談することなく自ら方法を考えて選択し、決定している。その資金繰りも、村近隣で宝くじを人々に売り歩くという方法で、ワンの社会関係を一気に広げたであろう。さらに母親から勧められて始めた保健ボランティアや女性住民組織の活動において、勝ち気で社交的な性格のワンはその場を取り仕切るリーダー的存在となっていく。女性住民組織に関わる研修や会議として、ワンは行政的な場にどんどん顔をだすようになり、またラオスや東北タイ以外の地域にも委員仲間と出かけるようになった。それらの経験は、かつて村のなか、あるいは家族・親族ネットワークが中心だった彼女の社会関係を、地域コミュニティの行政的ネットワーク中心の生活に広げてきたと言えるだろう。

2016年、村長選に出馬したワンは惜しくも落選する。公共的な言説としては、村長になるためには学歴等ではなく、その人の人格や能力が重要であると言われる。その一方で、実際は票集めのために行われる活動に、それ相応の資金も必要である。その資金力が当選結果を左右すると言っても過言ではないだろう。こうした社会経済構造のなかで制約されながら、ワンやそれ

に続く女性たちがどのようにリーダー的存在となっていくのか、今後も注目していきたい。

6. おわりに

本稿では東北タイ農村の地域コミュニティにおいてリーダー的存在である女性のライフヒストリーから、彼女がリーダー的存在になっていった背景を明らかにした。もちろん個人差はあるが、地域コミュニティのなかで女性がリーダーになろうとする際には、行為主体性が発揮されていた。ワンの場合は、ジェンダーをめぐる社会的な諸力のなかで、家族・親族ネットワークにおいて、あるいは住民組織などそれを越えた女性同士の地縁的な共同性のなかで、社会関係を広げながら行為主体性を発揮してきた。そしてより公共性の高い場へと、自らを位置づけようとしている。

本稿でライフ・ヒストリーの流れを重視したのは、ジェンダーの差をことさらに突出させるのではなく、東北タイ農村の地域コミュニティに生きる女性としての人生のなかで、何が選択されているのかを明らかにしたかったからである。少なくともそのなかでワンの選択は、男性と自分自身を比較し、対抗しようとするものではなかった。本稿の分析を踏まえて、東北タイ農村女性の人生のなかから、どのような問いが立ち現れてくるのか引き続き考えていきたい。

〈参考文献〉

Abu Lughod, Lila 1990 *The Romance of Resistance: Tracing Transformations of Power through Bedouin Women*. In *Beyond the Second Sex: New Directions in the Anthropology of Gender*. Peggy R. Sanday and Ruth G. Goodenough (eds.), pp. 311-337. University of Pennsylvania Press.

林行夫 2000『ラオ人社会の宗教と文化変容—東北タイの地域・宗教社会史』京都大学学術出版会。

- Keyes, Charles F. 1984 Mother or Mistress but Never a Monk: Buddhist Notions of Female Gender in Rural Thailand. *American Ethnologist* 11(2): 223-241.
- Kirsch, A. Thomas 1975 Economy, Polity and Religion. In Change and Persistence in Thai society. G. William Skinner and A. Thomas Kirsch (eds.), pp. 172-196. Cornell University Press.
- Kirsch, A. Thomas 1982 Buddhism, Sex-Roles and the Thai Economy. In Penny Van Esterik (ed.), *Women of Southeast Asia*. Northern Illinois University Press, pp. 16-41.
- Kirsch, A. Thomas 1985 Text and Context: Buddhist Sex Roles/Culture of Gender Revisited. *American Ethnologist* 12(2): 302-320.
- 木曾恵子 2010 「東北タイ農村女性のライフコースにおける「仕事」の再編—移動労働と住民組織の活動を通して」未刊行博士論文, 京都大学。
- 木曾恵子 2016 「タイ東北部農村における地域振興開発と女性住民組織—マハーサラカム県ナーチュアック郡の養蚕・機織グループを事例として」『研究年報 民族と宗教』(宮城学院女子大学キリスト教文化研究所) 49: 69-93。
- National Statistical Office (NSO) 2010 Raingan phon chak kansammano prachakon lae Kheha pho. So. 2543. (2000年国勢調査報告書)
<http://popcensus.nso.go.th/file/popcensus-20-12-54.pdf>
- 佐藤齊華 2015 『彼女達との会話—ネパール・ヨルモ社会におけるライフ/ストーリーの人類学』三元社。
- 佐藤康行 2009 『タイ農村の村落形成と生活協同—新しいソーシャル・キャピタル論の試み』めこん。
- 重富真一 1996 『タイ農村の開発と住民組織』アジア経済研究所。
- Tambiah, Stanley J. 1970 *Buddhism and the Spirit Cults in North-east Thailand*. Cambridge University Press.
- Tongdai, Pawadee 1982 Women, Migration and Employment: A Study of Migrant Workers in Bangkok. Ph. D. Thesis, New York University.

〈注〉

- 1 本稿は、科学研究費補助金(若手研究(B))「東北タイ農村の女性住民組織にみる共同性と公共性に関する研究」(2016~2018年度, 代表: 木曾恵子)の助

成による研究成果の一部である。

- 2 2002年、調査村では集落北部が行政的に分村した。その際、村長が古老から聞いた村の開拓史を文章化し、村長宅に掲示した。初期開拓者の名前や開拓場所、村名の由来などが明記されており、村人はこの内容を村落史として認識している。
- 3 東北タイで開拓移住を行っていたのは、言語的にはタイ語族のラオ (*Lao*) の人々である [林 2000]。本稿で取り上げる調査村も、ラオの人々によって開拓された村である。ただし現在、東北タイの人々にとって「ラオ」とは隣国ラオスに暮らすラオの人々を指し、自らはイサーンと名乗る。イサーンとは、サンスクリット語で東北の方角を意味し、タイ社会では東北地方やその住民を指す語として定着している。
- 4 本稿で使用する人物名は、すべて仮名である。
- 5 1 ライは0.16ヘクタールである。
- 6 マー (*mae*) とは、母親を意味し、母親世代の女性全般の名前の前につけて用いられる呼称である。
- 7 ピー (*phi*) とは、自分より年上の人全般の名前の前につけて用いられる呼称である。
- 8 ポー (*pho*) とは、父親を意味し、父親世代の男性全般の名前の前につけて用いられる呼称である。